

# 石評梅小説の〈戦士〉を巡って

—虚實のあわいでの戦い—

高 屋 亞 希

## 1 はじめに

1920年代に創作活動をしていた石評梅〔1902～1928〕の作品は、今日読まれる機会が多いとは言えないだろう。北京女子高等師範在学中の1921年に詩を発表した石評梅は、その後も母校の附属中學女子部で體育教師として教壇に立つ傍ら、自身が編集に携わっていた雑誌『京報・婦女週刊』『世界日報・薔薇週刊』等に、詩や散文を中心とした作品を発表し続けたが、1928年に急逝。その創作活動の期間は10年に満たない<sup>1)</sup>。

石評梅を有名にしたのは彼女の作品ではなく、寧ろ共産黨員であった高君宇との交際であろう。初戀の挫折がもたらした精神的苦痛を理由に、高君宇の生前は彼からの求愛を頑なに拒絶し続けたにも関わらず、死後は一轉して彼への貞節を誓い、生涯獨身を貫いた石評梅は、高君宇の死に對する悲嘆や愛惜の情を、多くの作品中で繰り返し表明している<sup>2)</sup>。そうすることによって亡き高君宇への貞節を口實に、全ての男性との愛情を巡る関係を予め封印したかのように見える。愛情を巡る一切の現實關係から逃避するために語られる饒舌な口實こそが、石評梅の作品の基調となっていることは、衆目の一致するところであろう。

その一方、1926年あたりを境にして、石評梅の作風が變化したこともつとに指摘されている。その變化を一言でまとめるならば、愛情を巡る自身の悲嘆を吐露することに終始する現實逃避的な傾向が、改革を進めるべく自ら現實社會に積極的に関わっていかうとする決意表明へと變わった、というものである<sup>3)</sup>。例えば、それまでほとんど書かれなかった小説が1927年以降矢継ぎ早に11篇發表されているが<sup>4)</sup>、内5篇が革命活動に参加したものの遂に志を果たせなかった、悲劇的な〈戦士〉を題材に取り上げている<sup>5)</sup>。

こうした變化は先行研究が指摘するように、1925年北京女子高等師範學校事件、翌26年の3・18事件等、當時の緊迫する社會情勢の中で、石評梅の親しい知人らが次々と逮捕され、更には殺されていった過酷な現實が背景となっていることは想像に難くない<sup>6)</sup>。石評梅自身それらの事件に論評することを通じて、現實社會と積極的に関わっていたことを考えると、〈戰士〉であった知人らの死という過酷な現實に直面することで、現實社會を所與のものと受けとるだけでなく、改革へ向け自ら一步を踏み出す決意がなされた、と解釋することも可能であろう<sup>7)</sup>。

しかしこの變化は實のところ、必ずしも明瞭なものではない。そもそも石評梅に於いて〈戰士〉という語は、人生の途上で遭遇する様々な困難と〈戦〉い、肉體のかつ精神的な傷を負いながらも生きぬき前進していくことの比喩として、以前からしばしば使用されており、狹義の革命活動での〈戦〉いのみに限定されるわけではない<sup>8)</sup>。愛情を巡って大きな挫折を體驗した石評梅は、生涯この方面での〈戦〉いから逃避し續けたが、實現への困難が伴うという意味では、一般的には革命での〈戦〉いは愛情を巡る〈戦〉いの比ではないだろう。事實、石評梅の小説に描かれる革命〈戰士〉は、決まって志を果たせない悲劇的人物である。實現への困難が逃避の理由でないとするならば、石評梅は男との愛情の駆け引きに、どのような實現不可能性を見ていたのだろうか。

本稿では、革命に参加した〈戰士〉が登場する5篇の短編小説のうち、とりわけ人生での〈戦〉いに倦んだ人間が、革命〈戰士〉との関わりの中で再び人生を〈戦〉いぬき氣力を取り戻す、という共通のモチーフを持つ「匹馬嘶風録」「白雲庵」「紅鬃馬」3篇の短編小説を中心に、愛情を巡る〈戦〉いがどのようなものと認識されているのか、また革命での〈戦〉いと如何なる違いを認めていたのか、具體的に検討していきたい。

## 2 夢想への意識

先ずは、革命事業に参加する経緯が詳しく書かれた「匹馬嘶風録」<sup>9)</sup>を見ていく。

P城で革命活動に関わる何雪樵は、前線での任務に赴くことになる。共に活動に参加してきた吳雲生は、好意を抱いてきた彼女との別れに、後ろ髪を引か

れる思いを抱く。雪樵はそのような雲生を逆に勵ます。前線に到着した雪樵は、生き生きと勇敢に任務に取り組む。そんなある日、P城に残り任務についていた雲生が仲間と共に敵の手に落ち、既に殺害されたことを知る。雪樵はそのことに衝撃を受け、自殺の衝動にかられる。拳銃をこめかみに當てるが、その瞬間何とか思いとどまり、亡くなった雲生の仇を果たすために生きぬくのだと決意する。

これが梗概である。小説は前線に向かう前日の、雪樵の内心の獨白で始まる。

全てが決まった後、私はまた黄昏時の葡萄園を訪れしばし座り込んだ。あまたの往時のことを一頻り思い起こし、目下の状況の算段もした。胸が塞がる思いを除くと、それほど悲痛さは感じない。空にはゆっくり白い雲が漂っていく。私は顔をあげてそれを眺め、苦く笑った。残夢がまさにこうして覺めていきますように。(p218)

空を覆う雲がゆっくりと流れ、遠ざかっていく。興味深いのは、これが單なる情景描寫に止まらず、雪樵が自らの心象風景に重ねているところである。P城で雪樵が置かれていた状況は、決してすっきりしたものではなかったらしい。出立を前日に控えた彼女の腦裡にあるのは、これから向かう前線での活動への期待や不安ではなく、P城で自分を覆っている雲、即ち残夢であることは注意すべきであろう。自分に付きまとうこの残夢が、P城を離れることで流れ去るのでは、という雪樵の期待をここから想像してよいかもしれないが、残夢が具體的に何を指すのか、これだけでは判然としない。

一旦は物思いにふけるのを止め、徹夜で荷造りに没頭する雪樵だが、作業が終わるやまた再び思いを巡らす。

私たちは二人とも生命を事業に渡した。だからこそ雲生は私が今回行くことを勵ますと同時に、後ろ髪を引かれる思いをしているのだ。だがどうして行かずに濟もうか。私たちの仕事のためであるのだから。(中略) 今日彼と私が道で亞芬と出會った後で、彼はすぐさま尋ねた。「雪妹、もし君が行った後、僕が不幸にもここで難に遭ったら、君はどうするかな？」

私は笑って答えた。「あなたがどうなろうと、私も亞芬が亡くなった天華に對してしたように振舞うわ。」彼は暗然としていた。私は更に笑いながら言った。「雲哥、もう少し英雄らしくなさいよ！ 私たちの事業が成功した暁には、一切の悲しみや悩みは全て解決するわよ。」(p219)

別れを前にした二人の會話は、すれ違っている。雪樵は自分の前線への出立が、共通の事業のためである以上、二人の間に見解の相違が生じることはあり得ないし、またあったとしてもそれは取るに足りない個人の感情に過ぎない、という論理に立っている。だが雲生が雪樵の口から引き出そうとしているのは、その取るに足りない個人の感情に関わることであろう。

雲生は共に活動に参加する仲間として、前線へ向かう雪樵を勵ますが、同時に名残惜しさを覚える。雲生はそうした己の未練を、自分が死んだらどうするのかという問いの形で口にする。この問いかけの眞意は勿論、雪樵にとって自分は是非にでも失いたくない特別な存在なのか否か、というものだろう。しかし雪樵の答えは雲生を失望させるものである。雪樵が引き合いに出した亞芬と天華は、小説中にこれ以上出てこないで、雪樵の發言の意味は推測になるが、雲生が失望するような答えであること、更には前述した雪樵の論理スタンスを考え併せるとおおよそは想像できよう。恐らく残された亞芬は、天華の死に對する悲しみを表面には出さず、共通の事業のための犠牲はやむを得ない、と毅然と振舞ったのであろう。落膽の色を隠せない雲生と對照的に雪樵は笑いながら、そうした悩みは遠い未來に解消されるだろうと雲生を宥める。

しかし事業と個人的感情との葛藤が、事業が成功した遠い未來には解消されるとの雪樵の主張は、論理的にはその通りであろうが、個人的感情はその間ずっと置き去りにされることになり、雲生に對する慰めになっていない。要はここでも、共通の目的である事業のために、個人的感情は己の中で耐えて、事業での更なる一步を踏み出せという主張が繰り返されているのだが、興味深いのはそれを英雄がとるべき行爲と認識している點である。事業で華々しく活躍するところにではなく、ともすれば前進を阻害しかねない個人的感情に耐え、事業での<戦>いに戻っていくところに、英雄、本稿で言うところの<戦士>の要件を、雪樵が認めている點が注視されよう。

こうした雪樵の言葉は無論、雲生の眞意に氣付かないまま發せられたわけではない。別の箇所「彼の遠まわしで婉曲な胸中を分らないことがあろうか」（p220）とあり、また更には「どうして彼を愛していると言えよう」（p220）とあるので、雲生が抱く愛情に氣付きながら、わざと無視して拒絶していることが分かる。それを前提に再び先程の二人の會話を讀むならば、革命が成功した後には個人的な感情の問題は解決されるだろうという雪樵の言い方は、雲生と雪樵のそれぞれが抱く相手への個人的感情の相違について、意圖的に觸れないでいることが理解されよう。イエスの答えを與えずに相手を失望させると共に、自身のノーの答えをも敢えて口にせず曖昧に濁す雪樵の態度は、そのうち相手が自分のことを斷念してくれるのを待つもの、と考えられないだろうか。

だとすれば小説冒頭で、雪樵が覺めて欲しいと望む殘夢の正體も推測できるだろう。雲生が雪樵にイエスを期待する愛情こそが、このP城で彼女を重く覆っていたものではないだろうか。雪樵の答えがノーであり、二人の間には雲生が望むような愛情關係が不可能であるならば、雲生が雪樵に對して抱く期待は、何ら結果を得られない單なる夢想に過ぎない。叶わないことが決まっている夢想に囚われて、無意味に精神をすり減らし、自ら苦痛を増やしているように、雪樵の目には見えていたことだろう。恐らく雪樵はP城を離れることによって、夢想に突き動かされている雲生がその夢想から覺めることを、内心願っていたと思われる。

しかし拒絶の答えが決まっているのであれば、雪樵はなぜ面と向かってノーを口にしないのだろうか。そもそも雲生が自分にとってどのような存在であったかを語る箇所には、雪樵の興味深い認識が見られる。

だが〔この先〕私が何とかしようともがくことができない時、己の過去を思うにつけ、このように懸命にもがくことは罪だと感じるのではないだろうか？（p220）

三年前、匪賊に親を慘殺された雪樵は、孤獨と悲しみで生きる意欲を失う。そのような折に知り合った雲生は、彼女のかけがえのない親友であると同時に、事業の上での指導者でもあった。つまり、悲しみで人生を＜戦い＞ぬく氣力を

失った自分を、懸命に慰め支えてくれる存在が雲生だったのである。この先P城を離れて、人生を<戦>う氣力を失い「何とかしようともがくことができない時」、また誰か雲生のような人の支えを頼りに、再び<戦>いの場に戻ろうとするだろう。だが「己の過去」、即ち雲生との関係を思えばそうした支えを得ること、ひいては人生を<戦>うことは罪を増やすばかりではないだろうか。これが引用文の意味であろう。

慰めが欲しい一心で雲生に縋り付くように生きてきた雪樵がふと氣付くと、雲生が彼女に愛情を抱くようになっている。そうした二人の關係に罪を見出すということは、自分の方こそが雲生を果實の得られない夢想へと誘惑した、と雪樵が罪の負荷を自分にかけているということだろう。そう考えると、面と向かってノーを口にしない理由も伺える。雪樵の意識ではこの事態を招いた責任を負っているのは現時点では自分であり、もし自分からノーを突きつけたならば、雲生を誘惑し弄んだ舉句に捨てるという不名譽な意味が確定してしまう。それに對し時間の経過と共に雲生の氣持ち、即ち殘夢が自分から離れていくならば、罪の記憶は残るにせよ、罪が自分一人に歸せられることはない。それは寧ろ愛情というものが一般的に、永遠に不變であることがいかに難しいかを示していると言えよう。雪樵はそう考えていたのではないだろうか。

愛情關係を巡って現實だと思っていたことが夢想へ轉化するという認識は、石評梅において繰り返される。「紅鬃馬」<sup>10)</sup>にもそうした認識が見え隠れしているが、先ずは梗概を見ておこう。

10歳の少女であった「私」は、郷里の英雄である郝夢雄とその妻馮小珊と知り合う。若くして志を果たした夢雄を敬愛すると共に、夫妻の仲睦まじい様子に「私」は好感を抱く。その後も親しい付き合いがあったが6年後、夫妻は他所の地に配屬になり「私」のもとを去る。更に8年の月日が流れる。その間に「私」は故郷を離れ北京にいたが、數々の悲しみや失望を経験し、心身ともに疲れ果て故郷に歸省する。父はそのような「私」を氣遣い、數日靜かな山中に滞在しようと「私」を連れ出す。優しく氣遣ってくれる兩親や故郷の自然に「私」の傷ついた心は幾分慰められるが、心の奥底に秘められた痛みが消え去ることはない。滞在する山中で眠れぬ一夜を過ごした「私」は、夜明けと共に一人起き出し、邊りの散策に出かける。その途中で偶然、郝夫妻の愛馬の聞き

覚えのある嘶きを耳にして、それを頼りに一軒の家に辿りつく。果たしてそこは郝家の邸宅。「私」は馮小珊との思いがけない再會を喜ぶと同時に、互いの變わりように感慨を感じる。馮小珊の口から、既に夢雄が1年前軍閥の手によって殺害されていたことを知り「私」は涙にくれる。だが更に、遺兒に夢雄の果たせなかった志を繼がせるつもりだと聞いた「私」は、塞いでいた心に一筋の光が射し込んだように感じる。

過酷な現實を＜戦＞い奮闘してきた「私」は、心身共に疲勞困憊して故郷に逃げ歸る。數年ぶりで故郷の自然に觸れた「私」は、「十有余年の生の夢がこの時、谷の水音で驚き覺めた」（p178）と意識した途端、郝夫妻の記憶が蘇る。恐らく「十有余年」は夫妻と知り合ってから現在までの約15年の月日を指しているのだろう。注意すべきなのは「私」が幼少時のことではなく、それ以降の自分が歩んできた人生の方を、夢の中にいたかのようにだと意識する點である。換言すると、悲痛な體驗を経てきた現在の自分の切實さを強調するために、憂いを知らない幼少時のことが夢のようだと持ち出されるのではなく、子供から大人へと成長する過程で人生を一人で＜戦＞ってきたことの方を、まるで夢想を生きてきたかのようにだと認識しているのである。それでは「私」はどのような夢想を生きてきたと言うのだろうか。

その後はただ未だに斷ち切れない一縷の愛情の絲の上を、巡回しているこの迂回する悲しい心が、まだ消えていないわずかな生命の残り火の中にあるばかり。涙を振るい、落ちてしまった希望の星と、どこで果てるとも知れぬ遙かな道程を眺めやる。これは當然、私が千里の道をはるばる遊學し求めたものではない。（中略）しかし運命がこのような割り振りをしてしまったのだ。私は懸命にもがいて逃れようとしたが、ついに果たせなかった。この八年間、私は異郷で（中略）この世の様々な味を遍く嘗めてきた。それによって初めて、元々世界というものが罪の集まる處であると知った。偶然私たちが無意識のうちに遺した過去の痕跡は、もしかすると罪惡を懺悔する名残となるかもしれない。ぼんやりとはっきり見えないうちに全てが過ぎ、消えてしまった。（中略）夢の中の人は行ってしまった。戦雲が依然深くたちこめ、塵埃が依然舞い上がる。（中略）でこぼこした荊棘の

山道のような世界で、私は突如として躊躇し、旅の疲れを感じた。  
(p177~178)

故郷を離れ北京へ遊學した「私」は、將來への夢を胸に描いていたことだろう。勿論、その夢は夢想として意識されていたのではなく、努力を重ねることによって一步一步實現へ近づいていく、現實と地續きのものとして意識されていたと想像される。しかし「私」は思いもよらぬ挫折を味わうことで、自身が漠然と抱いてきた夢想と厳しい現實の隔たりを強く意識するようになる。

どのような挫折を體驗したかという点について、「私」の語りは曖昧である。だが今の自分の心が「未だに斷ち切れない一縷の愛情の絲の上」を巡回していると表現していること、また別の箇所では「古都で情を埋めた過去」(p179)とも言っていることから、愛情關係に纏わる挫折と考えてよいだろう。経緯は一切不明だが、男との間で互いに相手に對して愛情を巡る何らの期待をする。相手と自分がどういう關係をとりたいかという点で、雙方の期待がすれ違い愛情は實らない。「夢の中の人は行ってしまった」とあるので愛情關係のみならず、當初の友情關係まで壊れてしまったのかも知れない。回想にある罪惡の懺悔が、この挫折した愛情體驗によってもたらされたと假定するならば、「匹馬嘶風録」と同様、自分の方が相手の男を誘惑し果實を得られない夢想に引きずり込んだ、と「私」が認識している可能性もあるだろう。そうでないにしても一般的に、雙方の思惑の違いから無意識のうちに互いを傷つけあうことはよくあり、そうした行爲を罪惡と呼んでいるのかも知れない。

愛情を巡って何の結果も得られず、相手の男との元々の關係も壊れ、精神的な傷と忌まわしい記憶だけが「私」に残された今、この愛情を巡って自分が費やしてきた時間や心身を消耗するやりとりの一切が、夢想に捕らわれ無意味なことに精力を注いでしまったと認識される。つまり辛い現實體驗によって、懸命に現實を<戦>っていると思ったものが、何の結果も得られぬ夢想の中で踊らされていただけだ、という意識が現れたのであろう。この時恐らく「私」は自分が生きてきた現實が夢想との境界を失い、これまでの人生、及び今後の人生までもが曖昧になったように感じていたのではないだろうか。

こうした「私」の徒勞感は、未來での<戦>いに向けて一步を踏み出す氣力



を削いでいく。周囲を見ると「戦雲が深く立ちこめ」ており、いつ終わるとも知れない＜戦＞いを氣力を振り絞りまだ續けなければならない。歸省した實家の門を前にして「私」は、「この門を開けた後、將來の夢はまたどのようなものになるのだろうか」（p178）と内心呟く。注意すべきなのは「私」がまだ實現どころか夢想すらしていない段階で、自分の將來を夢想だと言い切ってしまう点であろう。次に進める一步も實は現實ではなく、徒勞でしかない夢想なのかもしれない、という疲労感がこの時の「私」を襲っていたと思われる。勝算のない夢想に憑かれ、何の果實も得られぬまま罪を得て心身とも傷つき、更には人生を＜戦＞いぬく氣力を奪う危険なもの。それこそが、石評梅が愛情を巡る＜戦＞いに見た實現不可能性だったのではないだろうか。

### 3 夢想への意志

もっとも石評梅に於いて、全ての戀愛が否定的に扱われているわけではない。「白雲庵」<sup>11)</sup>には、＜戦士＞に人生を＜戦＞いぬく氣力を與えた愛情關係が描かれている。先ず梗概を確認しておこう。

父の知り合いの劉伯伯は幾多の不幸に會い、浮き世を捨て山中の白雲庵に住み、己の生涯についての著述をしているが、それがどのようなものなのか誰も知らない。ある夕、山中に一人散策に出かけた「私」は、人生への悲觀的な言葉を本に書き付ける。通りかかった劉伯伯は、まだ若い「私」が人生を悲觀的に見ることに不審を抱き尋ねるが、「私」は何も答えない。それを見た劉伯伯は誰にも打ち明けたことのない己の過去を明かす。それによれば、清朝名家の出身の劉伯伯は18歳の時、使用人の娘梅林と戀に落ちる。梅林は身分差を思って身を引こうとするが、若かった劉伯伯は聞き入れない。二人のことを知り激怒した父親に家を追い出された梅林は、恥辱に耐えられず湖に身を投げる。それをきっかけに社會や家庭に激しい憎惡を抱くようになった劉伯伯は、事件から2年後、家を出て革命活動に従事。長く困難な革命活動の中で、梅林への貞節を守り獨身を貫いた劉伯伯は、老年を迎え孤獨な今の自分には、人生を戦う氣力は残っておらず、もはや梅林の元に行ってもよいだろうと語る。これを聞いた「私」は劉伯伯の生涯に對して感動を覚え、劉伯伯が負ってきた任務をこれから自分が負うと申し出て、劉伯伯もその言葉に喜ぶ。

「私」が人生を<戦>う意欲を失った理由は不明だが、劉伯伯については戀人の喪失によって一度は人生を<戦>う意欲をなくすものの、再び氣力を取り戻して革命事業での<戦>いに参加する経緯が自身の口から語られている。先ずは若き劉伯伯が愛情を巡っていかなる夢に囚われていたのか見ておこう。

彼女(＝梅林)は枝垂れ柳にかかる上弦の月を眺めながら、ひどく憤って私に言った。「(中略)元々私は身分が違う若旦那様との交際は遠慮させていただきたいと思っておりました。しかし再三私に熱意をお示しになられたのは、若旦那様あなたでございます。あにはからんや私は卑賤の身、どうしてあなた様の愛情をお受けできましょう。(中略)今私は何のいわれもなくあなた様の家で笑いものになってしまいました。私は卑しい身分ではあります、だけど私は……。私の家にも親戚縁者がおります。里に歸ってどうして人に會わせる顔があらましよう?」(p200～201)

家を追い出されることを知った梅林の憤りは、自分を愛し結婚を望んだ男に對して向けられている。身分違いの戀愛は實現不可能だという自分の現實認識に對して、男は一切現實を見ずにただ性急に愛情を求めるばかりで、そのためにこの不幸な事態を予想通り招いたと梅林は認識している。この前の箇所で、男の母親は正妻を娶った後に妾として梅林を入れる形で事を圓滿に運ぼうとしていたにも関わらず、結婚は男女雙方の愛情によって結ばれるべきものであるという理想を男が固持したため、父親がこの件を知るところになったとある。愛情を抱く者が「自分の意志を持って己が愛する人を愛する」(p201)という決意が確固としたものであれば、困難ではあっても一步一步ゆっくり實現できるという男の認識は、身分違いの愛情の實現をあくまでも自分が今いる現實と地続きのもの、と理解していたことになるだろう。繰り返すが梅林の目には、男のそうした態度は夢想ばかり追っていて、現實を見ていないと映ったに違いない。事ここに至って、追い出され生きる道を斷たれた梅林からその過酷な現實を突きつけられても、男は自分の愛情を信じて暫く待って欲しいと女を宥めることしかできない。所詮この世では二人の愛情は實現できない上に、相手の男は夢想の世界に固執し、自分の置かれた辛い現實を全く理解していない。女

はその現実をただ一人で引き受け、死ぬ覚悟を定める。

「（前略）もしも若旦那様が梅林を慈しみ哀れみ可愛がって下さると言うのであれば、あなた様のお心の中に梅林のことを大事にしまっておく場所さえあれば、たとえ不幸にも私が死んだとしても、心残りは何もございません！若旦那様、その他の夢想は來世での實現を待ちましょう！」（p201）

梅林の自殺という最悪の結末に、男は茫然自失し生きる氣力を失う。重要なのは男にとって衝撃だったのが、單に戀人の死が辛いというだけではないことだ。自分の意志さえあれば實現できると信じ、現實の中でその實現のために奮闘していると思っていたことが自身の單なる夢想に過ぎず、しかもその夢想が梅林を死に追いやったという事實こそが、男には受け入れ難かったのではないだろうか。男は梅林に生涯取り返しのつかない罪を負ったのである。自分が死へと追いつめた梅林に對して、現實に償うことはもはや叶わない。男が唯一できることは、彼女が言い残した「心の中に梅林のことを大事にしまっておく場所」を持続けて欲しいという願いを引き受け、それを二人で交わした約束として生涯忠實に守ることだけであろう。この梅林が口にした願いは、この世にいない自分を生前同様に今後も愛し續けろ、と男に言っているに等しい。劉伯伯は死んだ戀人に操を立てて獨身を守り、且つまた彼女が死を以て示した過酷なこの現實を見据え變革するという形で、戀人の仇をうつという任務を己に課すのである。20年後の劉伯伯は「彼女は勇敢で美しく、清らかで凜然とした女性で、私にこうした多くのもの凄い事業を行うよう發憤させた」（p203）と回想し、死んだ戀人と交わした愛情の約束を支えに、残された人生を＜戦い＞ぬいたという認識を披露している。

ある意味では、生命を投げ出すことで相手に精神的な負債を負わせた梅林は、己の愛情を永遠に變わらぬ純粹なものとして確定すると同時に、自分に對して永遠に變わらぬ愛情を男に誓わせることにも成功したと言えるだろう。もし生きていれば、取り巻く環境の厳しさ故に、どちらかの愛情に變化が起きたかもしれないことを考えるならば、梅林が死者となることによって二人の間には初めて、男に生涯を生きぬく意味と慰めを與えるような完璧な純愛が可能になっ

たと言えるかもしれない。このような愛情のあり方が生きる氣力を失っていた聞き手の「私」を「奮い立たせ」(p206)るように、肯定的なものとして描かれている點は注意に値するだろう。

そう考えると「匹馬嘶風錄」結末部分で、雲生が殺害されたことを知った雪樵が衝撃を受ける場面にも「白雲庵」と同様、肯定的な愛情關係が成立する瞬間を見てもよいのではないだろうか。兩親を殺害されて生きる意欲を失った雪樵を慰め支えてくれた雲生が、愛情に應えるつもりのない雪樵を愛するようになったことにより、逆に雪樵の生きる意欲を奪いかねない存在へと変わったことは前述した。しかし殉難して死者となることによって、もはや彼は雪樵にとって現實に愛情を迫って自分を脅かす存在ではなくなる。つまり死者となった雲生には、自分を導き支えてくれたかけがえのない存在という意味だけが残され確定されるのである。小説は雪樵が雲生の仇をうつために生き抜くことを誓う場面で終わるが、大切な存在が死ぬことによって却って残された者に人生を<戦>いぬく意味を與える、という「白雲庵」と同じ構圖が繰返されているのが見て取れる。換言するならば、雪樵に人生を<戦>いぬく意味を授けるために雲生は死ななければならなかった、と言えるかもしれない。

現實だと信じて<戦>ってきたことが、實は囚われた夢想の中で無意味な奮闘をしてきたに過ぎないという事態に陥らないため、愛情のように夢想である可能性が高いことには己の人生を傾けようとせず消極的に人生を送ってきた者が、きっかけを得て革命事業での<戦>いに人生の意味を見出していく。石評梅の小説にはこうした事態が繰返されていることが確認できよう。しかし現實にはない理想の未來のために、現在の己を投入する革命もまたやはり夢想なのではないだろうか？實際、革命事業での<戦>いもまた夢想だという認識が、「白雲庵」には明確に打ち出されている。

小説には劉伯伯の口から、民國が成立し革命が成功したと思っても、その革命は表層的なものに過ぎず現實は何も変わっていない、と革命のゴールが無限に引き延ばされていった経緯が語られている。その間數十年に渡って、戀人の仇をうたんと氣力を奮い立たせ革命活動に従事してきた劉伯伯は、己の過去の<戦>いを振り返る。

今に至って、魂の炎は灰燼に歸し、熱情は白雲と化してしまいました。私は既に上帝の面前に立ち、この世の全ての望みや事業から手を引き、別れを告げたと感じています。宇宙は元々事が起こる何の原因ありません。〔宇宙を〕司り分かつ者は、ただ私たちの意欲と情の流れだけです。人生の喜びも結果は單に過ぎ去っていく悲哀であり、人生の希望も結果は人氣のない谷間の木靈に過ぎません。（中略）美人の口元に浮かぶ微笑とか、英雄の手に握られた寶刀はいずれも罪と罰の象徴であり、どちらも夢に弄ばれたものなのです。（p203）

望み目指したことと実際に實現されたこととの乖離への意識が、明確に語られている。事業など期待を込めて取り組んだ数々のことも實らず手元には何も残らない。その時、自分が熱意を込めて生涯を傾注したことがあたかも夢想のように感じられ、夢想の中で無意味に足掻いた「意欲と情の流れ」の記憶だけが残される。「美人の口元に浮かぶ微笑」が愛情という夢想へ誘惑する「罪の象徴」であるらしいこと、及び「英雄の手に握られた寶刀」、即ち＜戦士＞の果敢なく＜戦＞いも負債を負った「罰の象徴」であることは前述した通りである。そのいずれもが夢想に弄ばれているという言葉は、革命事業も愛情と同様、夢想であることに變わりないとの劉伯伯の認識を示しているだろう。

革命が實現した途端、夢想していたものは現實によって裏切られ、それが單なる夢想に終わったことへの虚脱感が、石評梅の小説には繰り返し描かれている。「匹馬嘶風録」や「紅鬃馬」でも＜戦士＞たちは現實に果實を得られず、自らの生命、親友や戀人など大切な存在を失うことばかりである。石評梅の小説に登場する＜戦士＞が決まって志を果たせない悲劇的な＜戦士＞であるのは、その意味で當然のことと言えよう。夢想に倦み人生の＜戦＞いに疲れた＜戦士＞たちが新たな一步を踏み出す革命事業ですらも、確かな現實の地續きにはなく、單なる夢想に過ぎないことが予め決定しているとすれば、＜戦士＞たちは何を慰めにしてその＜戦＞いを選び取ったのだろうか？

#### 4 夢想の共有

「白雲庵」では劉伯伯が老いてこれ以上＜戦＞う氣力を奮い立たせられない

が、自分が負ってきた任務は若者が既に引き受けてくれたので、自分はもう<戦>いから退いてもよからうと語る。その言葉に「私」は共感を寄せる。

「(前略) 人生の悲劇は全て生活と思想の矛盾が作り出したもの。理想と現實を調停することは永遠にできませんし、このために人類の苦痛は止むことがありません。私たちは不完全な社會に生活していて、至る所で現實と理想が衝突を續けています。この衝突の原因を解決するには、自ずと社會の生活と秩序を變革していく革命しかありません。しかしこれは數人の人間が數十年やれば成功できるというものではありません。(中略) 私たちの一生の精力は單なる一つの小さな點に、時間は一瞬のことに過ぎません。自ずと私たちの幸福や願望は永遠に實現できない夢となるのです。(中略) しかし私はまだ若者。自分が己の悲しみや憂いのために、こうしてひっそり死んでいくのを望んでおりません。新たな生命、新たな生活を見つけ自分の今後の事業をしていきたいと思います。それによって苦海に沈み浸かっている民衆に代わり、一鍬一鋤のわずかな氣力を絞って、幾らかでも彼らを助けられるような仕事を、そして後に續く若者のために、彼らがより良い環境でいられるようなことをしていきたいと思います。もしよろしかったら、伯父様がまだ肩から卸されていないその任務を、私にお任せ下さい。(後略)」(p204~205)

ここでも目指してきた夢想とそれが實現されない現實との乖離が語られている。その乖離の原因が「私」が言うように不完全な現實社會にあるとすれば、己の短い一生の中で夢想の實現という慰めが得られることは不可能に近い。劉伯伯とて何十年もその身を革命という夢想に捧げてきたが、ついにその生涯に於いて成功の果實を手に入れることは叶わなかった。しかしそのことに慰めが全くないというわけではない。

劉伯伯が背負ってきた革命事業の任務を、今後は自分の世代が擔っていくという決意が語られているが、それは言わば革命という社會的な夢想の共有化が圖られているということである。小説中に言及されていないが、いずれ數十年後には「私」が生涯負った任務を受け繼ぐ次世代の若者が出てくる、という見

取り圖を想定してよいかも知れない。それは革命という夢を共有する同志と言えるだろうが、重要な相違点もある。

「匹馬嘶風録」がそうであったように、同志が自分の思惑とは異なる個人的な夢を抱き、生きる氣力を脅かす現實の他者となりうる存在であるのに對して、ここでの後繼者は想像的な他者に過ぎず、そうした他者との夢の共有によって得られる慰めも觀念的なものであるということだ。結末部分で雪樵が殉難した雲生の仇をうつと決意するが、二人の關係は既に危險が予想される同志から、先達の意志を受け繼ぐ後繼者という安全且つ想像的な關係に置き換えられている。革命の後繼者を想定することで人生の慰めを得るという構圖は、「紅鬃馬」にも認められる。小説末尾で馮小珊から夢雄は殺害されたものの、果たせなかった彼の志を遺兒に繼がせるつもりだと聞いた「私」は、そのことに一筋の光を見出したと唐突に感じるのだが、その理由はもはや明らかであろう。

無論こうした革命という夢の共有による慰めは、飽くまでも想像的なものである以上、自分自身の具體的な將來についての夢とは慎重に分けられている。再び「白雲庵」に戻ると、任務を受け繼ぎ＜戦＞いを續けるという「私」の決意を聞いた劉伯伯は喜び、若者はそうあるべきだと「私」を勵ます。

革命の動機は時として己の苦痛に反抗するためですが、その結果は大多數の民衆の福利を圖ることになり、自分の福利を目論むことはできません。だからこれは投機によって利益を求める事業ではないのです。光明や幸福を求めんがために行なうのですが、これもまた夢想なのです。失望故にそれを呪詛してはなりません。(P205)

革命へ参加する動機、即ち自身による＜戦＞いの意味付けは夢想であり、往々にして現實に裏切られ、己に失望をもたらす。しかしそうした自分の意味付けとは別に、「民衆」や後繼者等、人ひとりの生涯を遙かに超えた何者かに＜戦＞いの意味が明かされるかも知れない。そのことを信じて＜戦＞い續けなければならない、と劉伯伯は言っている。ここに己の意志により自己實現をなし得るという樂觀は見當たらぬ。替わって人は己の人生の意味を自身で見通

すことも、期待する方向に自己實現を圖ることも出来ない、絶對的な受け身の存在に過ぎないという認識が覗いているだろう。

自分の意志では如何ともし難い辛い人生の道行きを、人から人へと夢を受け渡していく長い時の流れを想像することによって、乗り切ろうとする石評梅の<戦士>たち。彼らを見ていると、別の問いが一つ胸に浮かぶ。<戦士>たちが重く口を閉ざすもう一つの<戦>い、即ち愛情という夢を巡る<戦>いを、支え慰めてくれる存在は現實にはおろか、想像すら不可能だったと言うのだろうか？

#### 注

- 1) 最も早く出された石評梅の傳記の一つに、廬隱「石評梅評傳」(薔薇社編『石評梅女士紀年特刊』所收、世界日報社、1928.12)がある。楊揚編『石評梅作品集(戲劇遊記書信)』(書目文獻出版社、1985.2)はこの廬隱の文章の他、親友知人による追悼文や石評梅の書簡等の資料が所収されており、中國人民政治協商會議平定縣委員會文史資料委員會編『平定文史資料第十集石評梅專輯(下)』(1994.7)とも重複する部分が多い。その他の基本資料として楊揚編『石評梅作品集(散文)』(書目文獻出版社、1983.8)、楊揚編『石評梅作品集(詩歌小説)』(書目文獻出版社、1984.2)、李慶祥『評梅女士年譜長編(陽泉文史資料專輯)』(文津出版社、1990.6)等がある。日本語文獻として主なものに、吉川榮一「石評梅の生涯—石評梅略傳初稿」(熊本大學文學會『文學部論叢』27號、1989.3)、南雲智「高長虹と石評梅」(東京都立大學人文學部『人文學報』239號、1992.3)等がある。
- 2) 例えば「挽詞」(1925.3)、「祭獻之詞」(1927.3)等の詩や「一片紅葉」(1925.6)、「緘情寄向黃泉」(1926.11)等の散文がある。ちなみに高君宇の死は1925年1月のことである。
- 3) 前掲「石評梅略傳」でも、現實の生活を知らない樂觀的な情熱を基調とする1期、現實の過酷さに觸れたことによる悲觀的な態度を基調とする2期、全ての衆生に同情を寄せる視野が登場する3期に分けることができると指摘されている。2期から3期の變化については種々の先行研究の見解も一致しており、例えば近年の研究書である張衍芸『春花秋葉—中國五四女作家』(人民文學出版社、2002.5)でも基本的に變わらない。
- 4) 志平「石評梅的作品目錄」(前掲『平定文史資料第十集石評梅專輯(下)』所收)、及び楊揚『石評梅作品集』の分類に従う。但し各アンソロジーによって分類が異なる場合もある。例えば劉屏選編『棄婦(中國現代才女經典文叢)』(北京燕山出版社、1998.2)で小説に分類されている20篇(26年以降の執筆のものは17篇)のうち7篇を、「石評梅的作品目錄」では散文に分類している。實際、一人稱で主觀的な心情を吐露したような作品については、小説と散文の境界は極めて判別しにくい。



- 5) ここで言う5篇とは、本文中で詳細に論じる「紅鬃馬」「白雲庵」「匹馬嘶風録」の他、「余輝」（1927.5）「歸來」（1927.6）である。この5篇以外の小説についても、戀愛等で人生を生き抜く氣力を失った人物への同情を描いたものや、女性が置かれている状況を告發した問題小説等に内容はほぼ集約され、後述するように革命活動に参加する〈戦士〉を描いた小説と通底する世界観が認められる。女性問題を扱った石評梅の作品については、先行研究に中本百合枝「石評梅の作品に於ける包辦婚姻問題」（『國學院雜誌』88-11 號、1987.11）がある。
- 6) 3・18 事件では北京女子高等師範の後輩であった劉和珍や楊德珍、4 月には京報社長の邵飄萍、翌 27 年は恩師の李大釗等、知人が次々と殺害されている。
- 7) 變化の背景にまで踏み込んで論じた先行研究としては、楊揚「她的心、爲英雄呼喊！—談石評梅幾首詩作的意義（代前言）」（前掲『石評梅作品集（詩歌小説）』所收）、劉思謙『「娜拉」言說—中國現代女作家心路紀程』（上海文藝出版社、1993.12）等がある。楊揚の解釋では、亡き高君宇の革命に對する高邁な意志を、石評梅が彼への強い愛情故に受け繼いだためと見ている。劉思謙は楊揚の解釋を男權主義的であるとして否定。人生をよりよい方向へ實現させたいという積極性と、現實の全てが夢想に過ぎないとする人生への消極性との、相矛盾した二つの欲望が石評梅の中でせめぎ合っていたとした上で、20 年代後半の緊迫した情勢を背景に現状を改善したいという積極性が、革命への夢想という形をとったとの見方を示している。また劉思謙は、石評梅が革命への参加を希望しながら実際には参加しなかったことにも觸れ、革命に参加しながら志を得られない〈戦士〉を描いた小説を書くことが、自慰的な行爲となっている點を指摘している。本稿はこの劉思謙の見解を踏まえた上で、ある事柄、例えば革命参加が人生への積極性を示す一方で、逆に人生への消極性を導くことがあるという二面性を問題にしている。
- 8) 他にも「英雄」「健將」等の語が見られるが、ほぼ同一の意味で使われていると判斷し、本稿では分析用語を「戦士」で統一した。
- 9) 初出は『世界日報・薔薇週刊』周年紀年増刊（1927.2）で未見。本稿では前掲『石評梅作品集（詩歌小説）』をテキストとして使用し、括弧内に引用頁數を記した。
- 10) 初出は『晨報副刊』第 1566～1568 號（1927.5）で未見。本稿では前掲『石評梅作品集（詩歌小説）』をテキストとして使用し、括弧内に引用頁數を記した。尙この小説には郷里に實在のモデルがおり、その點については祥祥「《紅鬃馬》人物考證」（中國人民政治協商會議陽泉市委員會文史資料研究委員會編『陽泉文史資料第 2 輯（石評梅專集）』所收、1985.5）に詳しい。
- 11) 初出は『世界日報・薔薇週刊』第 37～38 期（1927.8）で未見。本稿では前掲『石評梅作品集（詩歌小説）』をテキストとして使用し、括弧内に引用頁數を記した。